3.平成12年度に特に注意を要する病害虫

北海道病害虫防除所

1.はじめに

北海道病害虫防除所、道立各農業試験場および道農業改良課等で実施した病害虫発生予察事業ならびに試験研究の結果から平成12年度に特に注意すべき病害虫について報告する。

2.平成11年度に多発した病害虫

平年に比べてやや多発～多発した病害虫を表1に示した。

3.平成11年度に新たに発生または命名された病害虫

病害９種、害虫９種について表2に示した。

4.平成12年度に特に注意を要する病害虫

(1)水稲のアカヒゲホソミドリメクラガメ

7、8月の高温経過により、雑草地等での第２世代成虫の発生期は、平年より1週間以上早くなった。このため本田への侵入は早まった。発生量は、水田でのすくい取りでは各定点、一般田とも平年並であったが、夜温が高かったことからカメムシの活動が活発となり、誘殺数は平年値を大きく上回った。

一般に第３世代は稲体上ではあまり増殖しないが、昨年は多発生となった上に通常発生しない第４世代まで見られた。

このようなカメムシの発生経過に加え、７月下旬から８月上旬の降雨により適正な防除ができなかったこと等から斑点米が多発し、特に割籾の多い「ほしのゆめ」で落等が多かった。

昨年は例年にないカメムシの発生経過となり、第４世代成虫まで発生したことから、産卵量が多く、本年は雑草地での発生量が多くなると見込まれる。従って畦畔等でのすくい取りを実施し、「ほしのゆめ」の栽培に当たっては特に発生量に注意する必要がある。

(2)水稲のフタオビコヤガ

水稲の常発害虫であるフタオビコヤガは、平成4年の多発以来少発生が続いていたが、平成9年頃より発生が再び目立ち始め、昨年は道内のほぼ全域にわたって多発生となった。第2回幼虫の被害期である8月上旬は多めの発生であったが、その後さらに急増し、8月下旬の第3回幼虫の発生量は多発生となり、止葉や次葉を食害された状態で収穫を迎えた水田が各地で見られた。

多発生原因として、近年の殺虫剤施用がカメムシとイネドロオイムシに対象を絞って行われるようになったことに加え、夏期の高温によって発生時期と防除時期が平年より早まったことが考えられる。

一般に第2回幼虫の防除時期はカメムシの防除時期と一致するが、高温の年にはカメムシの防除時期よりフタオビコヤガ幼虫の防除適期が早まるため、注意が必要である。

(3)秋まき小麦の赤さび病

5月下旬から6月までの高温経過、特に6月が月を通して高温少雨であったため、発病に好適条件が続き、6月以降急増した。7月に入ってもその勢いは衰えず、本病による枯れ上りのため小麦の枯凋期が早くなり、子実が十分に充実する前に枯凋し減収したほ場も見られた。

本病は、近年徐々に発病が目立つようになっているが、この原因として、主要品種が本病に弱い「ホクシン」に置き換わったため、病原菌密度が徐々に高くなってきていることが考えられる。

本病は初発時期の早晩よりも、初発後の気象経過に大きく影響を受ける。また高温で急激に発病が増加するため、防除が手遅れになりやすい。実際、昨年は赤かび病まで防除に入らなかったため、多発したほ場もあった。

初発後の気象経過に注意し、気温が平年より高めに経過すると見込まれる場合は、薬剤散布を行う。本病の防除は、出穂後に赤かび病防除を行うことと薬剤の残効から、出穂前が効果的である。ただし、早すぎる防除は残効が切れるため、散布時期には注意が必要である。

(4)小豆のマキバメクラガメ

網走・十勝支庁管内の小豆で、マキバメクラガメによる吸汁被害粒の発生が目立った。十勝中部地区では、26ほ場中20ほ場で被害が確認され、吸汁被害粒率は4.4%と前年の約2倍に達した。また、北見農試でも吸汁被害粒率は7.1%で、前年の1.7%を大きく上回った。

これまでの北見農試の調査により、本種による加害時期は８月中旬から下旬以降と推測されているが、昨年は高温乾燥経過により、加害世代の発生密度が大きく増加したことに加え、発生期が早まったことが、被害多発の原因と考えられた。

本種の防除法は明らかになっていないが、加害時期の茎葉散布のほか、移動力の高い本種に対して、小豆ほ場周辺の栽培作物の種類やほ場内外の雑草管理も検討する必要があると考えられる。

なお昨年は、十勝管内において、ねぎでも本種によると思われる吸汁被害が確認されている。

表1　　平成11年度にやや多発～多発した病害虫

作物名	病害虫名
水稲	イネミギワバエ、フタオビコヤガ、アカヒゲホソミドリメクラガメ
小麦	雪腐病、赤さび病
小豆	茎疫病
ばれいしょ	軟腐病、粉状そうか病
てんさい	根腐病(黒根病を含む)、ヨトウガ(第2回)
りんご	腐らん病、斑点落葉病、キンモンホソガ、ネズミ類
たまねぎ	乾腐病
にんじん	キタネコブセンチュウ
だいこん	軟腐病、キスジトビハムシ
キャベツ	ヨトウガ、コナガ
きゅうり	べと病
牧草	コガネムシ類、ウリハムシモドキ

表2　　新たに発生または命名された病害虫

作物名	病害虫名 (病原菌・害虫の学名)	病徴・加害様相
とうもろこし	オオタバコガ(新寄主) *Helicoverpa armigera*	絹糸の基部がかじられて落下、雌穂の先端内部の欠失。
菜豆	インゲンマメゾウムシ(新発生) ***Acanthoscelides obtectus***	**貯蔵中の子実に径約2mmの空洞が1～10個。**
たまねぎ	苗立枯病(病原菌の追加) *Pythium spp.*	1～2葉期の苗が地際から倒伏、あるいは外葉から枯死。根は褐変腐敗、消失。5～10mmのスポット状に発生。
だいこん	タネバエ(新寄主) *Delia platura*	根部を食害。食痕は新しいもので径1～2mm、古いもので3～5mmあるいはそれ以上、深さは中心部に向かって5～10mm程度。
きゅうり	果実腐敗病(新称) *Fusariumu pallidoroseum*	輸送中に、果実の一部が水浸状となり、濃緑色を呈してくぼみ、白色～淡桃色のかびに覆われる。
メロン	アマヒトリ(新寄主) *Phragmatobia amurensis*	収穫期の果実の下面接地部に幼虫が2～3頭寄生し、果皮を薄く削るように食害する。
レタス	穿孔病（新発生） *Microdochium panattonianum*	葉に直径２～３mmの灰白色～褐色の斑点。葉肉部では中央部が脱落し円形の穴。葉の中肋部では紡錘形の深く窪んだ斑点。斑点はやがて融合し大型病斑となり、葉全体が枯死。
レタス	ヒラズハナアザミウマ（新寄主） *Frankliniella intonsa* クロゲハナアザミウマ（新寄主） *Thrips nigropilosus*	主に下葉の葉裏に寄生し、寄生部位は肌荒れ状になり褐変。
いちご	炭そ病（新発生） *Colletotrichum acutatum*	葉では黒褐色の破けやすい病斑を多数形成。葉柄では褐～黒色のやや陥没した紡錘形の小病斑を形成。重症のものは病斑が葉柄を取り巻き、その先の部位が枯死。
食用ゆり	チビクロバネキノコバエ （新寄主） Bradysia agrestis	球根の下部（根の周辺）が褐変、直径５mm前後にやや陥没、コルク化。
ヤーコン	半身萎凋病（新称） Verticillium dahliae	株の全体または片側の葉がしおれて黄化、後に枯れ上がる。茎を切断すると維管束が黒褐変。
ひまわり	斑点細菌病（新発生） *Pseudomonas*	葉にはじめ水浸状の斑点が現れ、後に２～３mmの葉脈に囲まれた暗色で多角形の病斑となる。やがて病斑は融合し大型病斑を形成。

	syringae pv.helianthi	
スターチス	黄化えそ病（仮称） *Tomato spotted wilt virus* (TSWV)	はじめ生長点付近の芯葉が黄化し、葉の展開が停止。黄化葉はえそを生じ、褐色あるいは赤褐色となり枯死。
トルコギキョウ	青かび根腐病（新発生） *Penicillium sp.*	草丈が低くなり、開花しないかまたは背丈が低いまま開花。細根が脱落、根に黄～黄緑色のかびが縞模様に生え、その部分の根は褐変。
ばら	半身萎凋病（新発生） *Verticillium dahliae*	下葉から黄化萎凋し、徐々に上葉へ進展。全身に激しい萎凋症状、または株の片側のみが軽い黄化、萎凋。発病株のシュートを切断すると維管束褐変。
シロクローバ	ワモンノメイガ（新発生） *Nomophila noctuella*	葉および葉柄を食害。
しばざくら	ナガチャコガネ（新寄主） *Heptophylla picea*	幼虫が根を食害。枯死する。

目次へ戻る